

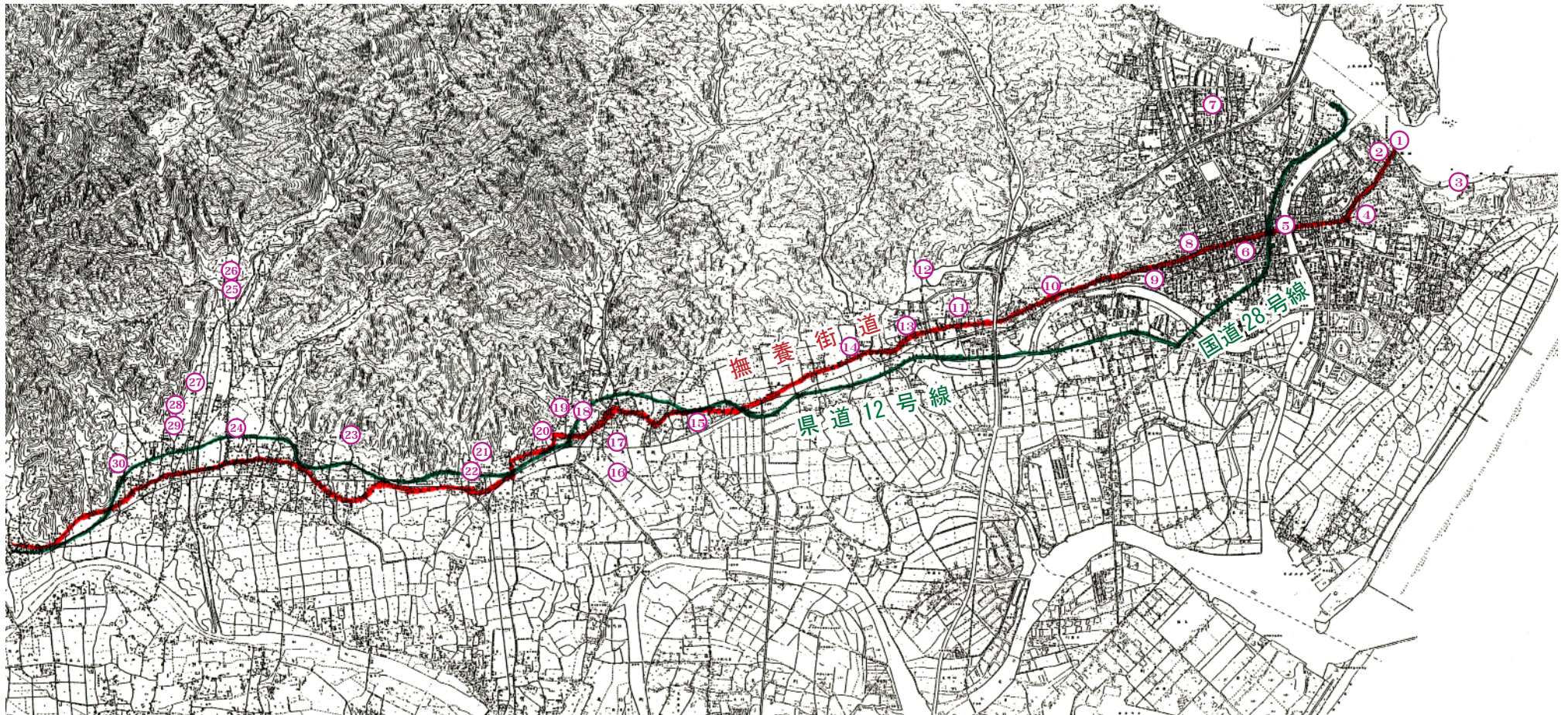
撫養街道を行く



撫養街道

撫養町岡崎から大麻町松まで

- | | | | | |
|--------------|--------------|-----------|--------------|----------------|
| ① 岡崎港 | ⑦ 入浜式塩田発祥の地 | ⑬ 一里松跡 | ⑰ 東林院、宇志比古神社 | ⑲ 大麻比古神社 |
| ② 岡崎御屋敷跡 | ⑧ 事代主神社 | ⑭ 大江巳之助邸 | ⑱ 阿波神社 | ⑳ ドイツ橋、めがね橋 |
| ③ ワンワン風 | ⑨ 市杵島姫神社 | ⑮ 姫田の瓦製造所 | ㉑ 池谷宝懂寺古墳 | ㉒ ドイツ館、賀川豊彦記念館 |
| ④ 鳥居記念館、岡崎城趾 | ⑩ 金刀比羅神社、長谷寺 | ⑯ 姫田港 | ㉓ 天河別神社古墳群 | ㉔ ドイツ兵の慰霊碑 |
| ⑤ 文明橋 | ⑪ 木津城趾 | ⑰ 森崎貝塚 | ㉕ 萩原2号墳 | ㉖ 板東俘虜収容所跡 |
| ⑥ 鳳鳴閣跡 | ⑫ 大代古墳 | ⑱ 大谷焼の里 | ㉗ 霊山寺 | ㉘ 極楽寺 |



撫養街道



8世紀の初め、大宝律令（701年）によると、全国58国は、畿内5か国を除いて、都を中心に7つの幹線道路（東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海）によって連絡網が張られていました。そのうち四国には南海道が走り、その一部が、のちの撫養街道に当たります。この時代には、船が淡路の福良から牟屋（むや）に着いていて、

四国の玄関口は、現在の撫養町木津あたりであったと推察されています。

江戸時代に入ると、蜂須賀家政により阿波の五街道が整備されましたが、その1つが撫養街道です。吉野川の北岸を通るため川北街道とも呼ばれ、現在の撫養町岡崎から吉野川北岸を西走して、池田町の州津渡して伊予街道に交わるまでの67.3キロの街道です。

岡崎は、阪神から分国淡路福良を経て阿波に入る玄関口で、四国八十八ヶ所を巡礼するお遍路さんにとっても起点となる場所でした。江戸時代中期以降は、岡崎に上陸し撫養街道を通して一番札所に向かうお遍路さんも多く、街道筋は大変な賑わいでしたが、平成10（1998）年4月に明石海峡大橋が開通し、大桑島に入る高速船も廃止されると、撫養を通して一番札所を目指すお遍路さんも居なくなりました。

撫養街道は、今は、静かな佇まいを見せているが、古来より、人・物・技術・情報などが盛んに行き来し、四国の玄関口として栄えた街道であり、様々な往来のなかで育まれてきた歴史や文化の宝庫となっています。ここで、その一部をご紹介します。

撫養港（岡崎港）



徳島藩の藩祖 蜂須賀家政は、阿波入国早々の天正13（1585）年に、淡路の福良から鳴門へ渡海する船頭10人を選んで渡海の役につかせ、天正19（1591）年には彼らの家宅を岡崎に移転させた。この船頭達は岡崎10人衆と呼ばれた。

明治3年御番所が廃止された後も、民政所によりその殆どは船問屋に所属し渡海業に携わった。明治初期までは、廻船問屋の和船（何隻もの千石船を所有する問屋もあった。）で、江戸・大坂、果ては北海道までの廻航が行われ、撫養港は商品の積み下ろしで賑わった。その後も、様々な海運業者の汽船や西洋型帆船が行き交い、撫養港は盛況を呈した。

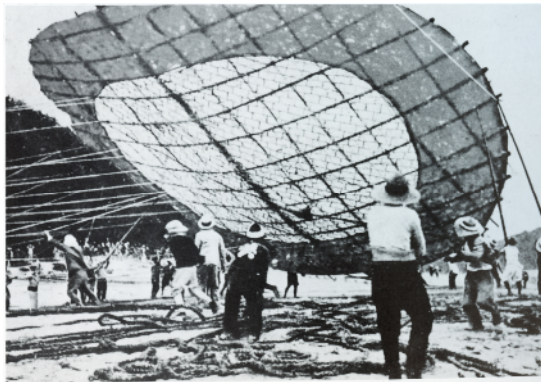
御屋敷跡



撫養街道の起点に岡崎御屋敷があった。後には陣屋とも呼ばれ、交通を取り締まるとともに、板野郡役所としての機能を持っていた。

2,947 坪（約 10,000 m²）の広大な敷地を有し、参勤交代の際には、休憩所ともなった。明治3年10月廃止。現在は跡地中央に道路が走り、当時の面影は見あたらない。

わんわん凧



わんわん凧の起源は、元禄5（1692）年、岡崎の蓮華寺本堂の再建のお祝いに、棟染又右衛門が、余興として宇多紙50枚張りの丸凧を揚げ、喝采を博したのが始まりと言われている。

「わんわん」とは凧のことで、最初に作られた凧が凧の図柄であったため、その愛称が定着したのではないかと考えられる。

その大きさには目を見張るものがあり、最大のものは直径24m、総重量5トンもあり、世界一と言われる。これを揚げるのには200人かかったと言われている。また、わんわん凧の全盛期、昭和10年頃の成人男性の1日の給料は1円50銭ほどであったが、製作費には、18円ほどかかったそうである。

町内会などが競って凧作りに励み、勧進元から「阿波名物凧合一覧」の番付表も出された。町内会などでは、炊き出しも行われて、凧揚げは騒然と賑わう一大イベントであった。総出で作り上げた巨大な凧が、風を切り裂き大空へ吸い込まれるその姿は圧巻で、多くの人がとりこになった。

しかし、凧揚げの会場となる広大な砂浜（里浦町広戸）が、農地拡大などで縮小され、次第に娯楽も増えるにつれて、凧を揚げる姿は昔ほど見られなくなった。

現在は、凧愛好家のグループによって継承され、5月から7月にかけて強いマゼ（南東の風）が吹くと、里浦町の海岸などで行われる鳴門の初夏の風物詩となっている。

鳥居記念館



県立鳥居記念博物館は昭和40年に建設され、考古学・人類学の東南アジアを中心に鳥居龍蔵博士夫妻の遺品、調査資料の一部を展示している。その数は約260点である。

鳥居龍蔵（明治3（1870）年4月4日～昭和28（1953）年1月14日）は、鳴門市の名誉市民である。人類学・民族学・考古学の草分け的存在で、彼ほど東アジアをくまなく駆けめぐった学者はいない。鳥居博士の研究テーマの根幹にあったのは「日本人のルーツ」であり、その研究対象は非常に広範であった。そのため、後に「総合人類学者」とも呼ばれている。東アジアで、これほど綿密な調査がほかになかったため、博士の研究成果と写真は、現在でも第一級の資料となっている。

世界的にも有名な博士の業績を顕彰しようと、当時の原知事や谷市長が計画し、妙見山山頂に建設された。

市長は、全国の鳴門出身者を訪ね、寄付集めに奔走した。市民も積極的に募金運動に参加し、市内の子どもたちの貯金箱からも献金されるなど、市民挙げての浄金が投入されている。

鳥居記念館は今もなお鳴門市民のシンボリック的存在である。

撫養城趾

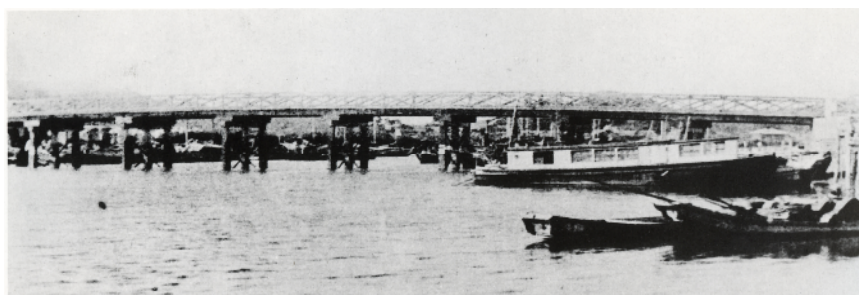


岡崎城ともいい、阿波国東北の要衝にあるこの城は、現在妙見山と呼ばれる標高約60mの山頂東寄りにあった。鳴門海口を見下ろす位置にあり、真下に官道が走る阿波東北部の要衝の地である。

この城は、戦国時代に小笠原将監の居城として築城され、その後小笠原氏・四宮氏・益田氏らが居城とした。天正13（1585）年に蜂須賀家政が阿波へ入国した時に、東北のおさえの城として益田内膳正忠が守った。阿波九城の一つであり、一国一城令により寛永15（1638）年に廃城となった。

現在の鳥居記念館あたりに本丸が、妙見神社の境内あたりに二の丸が、千畳敷あたりに三の丸があった。

文 明 橋



撫養町林崎と斎田の間を流れる撫養川に初めて橋が架けられたのは、明治3年であった。藩政時代には舟三艘と渡し守の役人が置かれて渡しで向こう岸

文明橋畔に係留される文明丸

の斎田に渡っていた。当時の文明橋には、カヤの木で作った美しい欄干がついていた。

川の東側の林崎、岡崎は歓楽街で、夜ともなると遊び客がこの橋を通った。右岸には繁栄を極めた山西庄五郎（回船問屋）棧橋と白壁の倉庫が並んでいた。

長さ55m・幅7m。当時は破格の長大橋で、川東の豪商や庄屋等5名が建設費を調達して自前で建設した。

2代目は大正7年頃架け替えられ、昭和6年撫養町全域に上水道が施設されることになり、水道の鉄管を支える鉄橋が併設され、太い水道管を抱きこむように造られた。

3代目は昭和13年の建設である。橋には粋な照明灯があり、戦後まで、西詰めの岸壁には、紀州から満艦飾のお接待船が長期に停泊し当時の風物詩であった。

現在の文明橋は補強工事を伴ったことから風情はなくなったが、建設されてから70年余り経過したことになる。かつてこの一帯は県内有数の河港で、文明開化の受け入れ口として繁栄したことから、文明橋の名前が付けられた。

また、文明橋を起点とした海上交通については、撫養川から旧吉野川・鍋川・今切川・榎瀬川・吉野川を経て新町川へ達する木造の和船を使った航路が、古く藩政時代から、撫養～徳島間の水上交通路として利用されていた。

明治になってからも、引き続き盛んに利用されたが、明治30年頃から、「早船舎」が、徳島市の新町橋下から文明橋東詰北側の棧橋までを航行する巡航船（小さな汽船で運賃大人15～20銭）を航行させ、荷物と人を運ぶ交通手段として広く定着し繁盛したが、陸上交通の発達とともに利用客が減り、昭和19年に廃業された。

鳳 鳴 閣



大正9（1920）年に、板東俘虜収容所のドイツ兵俘虜により設計され、板野郡が公会堂として建設した。当時としては木造2階建ての大建築で、郡や撫養町をはじめ郡内の各町村の公会堂としての機能を果たしたが、大正12（1923）年の郡制廃止後は撫養町に寄託され、昭和22（1957）年の鳴門市制施行後は市役所として使用。昭和38

（1963）年に市役所が現在の位置に移転するとまもなく老朽のため取り壊された。

入浜塩田発祥の地



慶長4（1599）年に、現在の鳴門市立図書館の北隣にあるえびす山で、馬居七郎兵衛と大谷五郎右衛門が撫養地方で初めて入浜塩田を築造したと伝えられている。

浅い海の所々に州がある地形や、雨量が少なく風が強い気候など、自然条件が製塩に非常に適していたこともあり、塩田は瞬く間に12か村となり、鳴門塩田の基礎ができた。

塩業は次第に発達し、地域が発展する原動力となっていく。

生産された塩は、江戸をはじめ各地に輸送され、「斎田塩」として全国的にその名を知られるようになり、現在の撫養町や鳴門町一帯には、広大な入浜塩田が広がっていった。

事代主神社と芭蕉の句碑



正保年間（1644～7年）の創建と伝えられる。「おいべっさん」と親しまれ、南浜の商店街を氏子地域とする商売繁盛の神様である。

境内には松尾芭蕉の「木の下に汁も膾（なます）も桜かな」と記された句碑がある。桜塚と呼ばれ、文政8年に南浜の御銀主であった里見千子（平兵衛）によって建てられた。またその横には、後に、千子の子である千化の句碑もそ

の子孫によって建てられた。

市杵島姫神社と藤原基房の歌碑



「べんてんさん」と親しまれる市杵島姫神社の境内には、木津神の浦の歌碑がある。

この歌碑は、藤原基房が長元2（1029）年に阿波の守に任じられ、この地を訪れた時に詠んだ歌が刻まれており、「後拾遺和歌集」にも載せられている。

「阿波の守となりて また同じ国に帰りなりて下りけるに 木津神のうらというところ

ろに 波が立つを見て詠める」「木津神のうらに としへて寄る波も 同じ所に帰るなりけり」。この碑は、嘉永2（1849）年に、徳島藩第13代藩主 蜂須賀斎裕（なりひろ）と先代の斎昌（なりまさ）が建立したもので、和泉砂岩で造られたため、剥

落により文字の判読ができなくなったことから、昭和49（1974）年に鳴門市が新碑を建設した。当時の阿波の入り口は、この木津神の浦であったことがわかる。

現在、鳴門市には、「こつかみ」という字地名は無く、通称名として、「木津神（こつがみ）橋」・「木津神地区」・「木津神小学校」などが用いられるだけである。しかし、野口年長の『栗の落穂』が、地人の話す「コツガミ」を、「コヅカミ」ではないかと疑問提起しており、『国歌大観』も「こづかみ」としている。これについて、『鳴門市史』は、「こつかみ」は、今の木津神、即ち、木津であると記述している。また、『板野郡誌』は、「南浜」のかたに「馬目木」という処あり、この付近一帯を「木津神浦」と称すと解説している。

ちょう こく じ 長 谷 寺



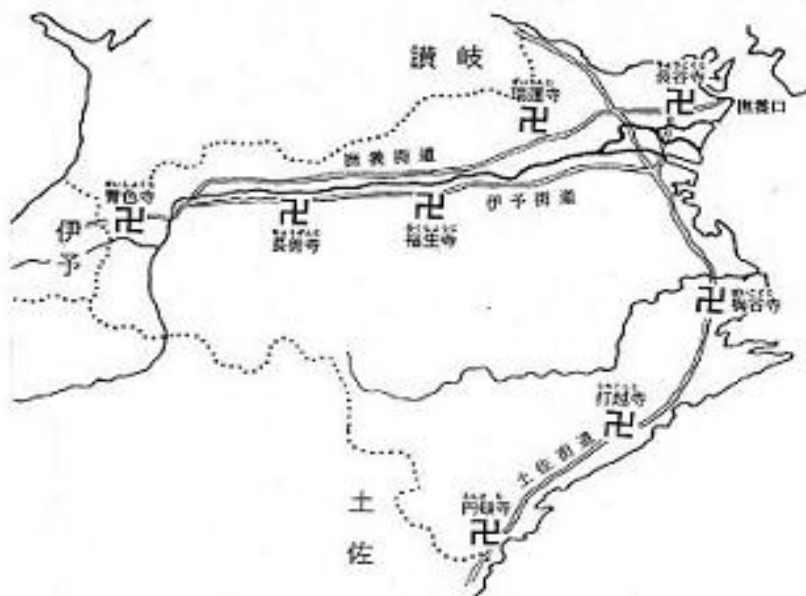
文明12（1480）年、寺の周辺一帯が海であった戦国時代に木津に住んでいた船戸左衛門尉次正が信仰していた大和国の長谷寺（はせでら）に月参りをした際、長谷観音と同じ木でつくられた観音像をいただき、自分の屋敷に建てたのが寺の始まりである。はじめは「木津江寺」と呼ばれた。「木津の入り江の寺」、そして「梢」の部分で作られ

た観音さんのおわす寺という意味もあったのであろう。

境内には、かつてこの地が海であった頃、船を繋いだというイチョウの大木がある。

慶長3（1598）年、蜂須賀家政により駅路寺（阿波藩独特の制度で真言宗8ヶ寺がこれの指定を受けた）に指定された。

藩内主要街道に沿った旅人たちの便宜を図るとともに、不審な旅人などを監視することもまた、駅路寺の重要な任務だったといわれており、経費として10石が付与された。
※右は駅路寺の配置図（右上に長谷寺）



金刀比羅神社



金刀比羅神社は、慶長6（1601）年、撫養城主益田大膳が造ったもので、祭神として大物主命、相祭神として少名彦名命と猿田彦命が祀られている。

海上安全、交通安全、家業繁栄、福德円満、夫婦和合、縁結びや開運の神として、近郷近在はもとより広く阿波から淡路に至るまで広く崇敬を集めてきた。寛永17（1640）年には、阿波藩主蜂須賀忠英が社

殿を再興し、その後も歴代藩主による再興や社殿参詣等、厚い信仰の対象であった。

社宝に金紋五七桐陣太鼓、唐金華山御軸などがある。

明治元年、神仏分離令により別当長谷寺を分離し、金比羅大権現の旧称を現社号に改め、同7年に郷社に列した。例祭、祈年、新嘗の三大祭には町長が献幣使として参向するなど、官民あげての崇敬があった。昭和20年敗戦の後、神道指令により国家管理を離れ一宗教法人となったため、氏子地域は地元木津のみとなった。

藩政期より金比羅神社の奉納相撲は庶民に大変喜ばれ盛会であった。その様子は「阿波名所図絵」にも描かれ、阿波力士はもとより淡路、大阪、讃岐の力士も大勢参加して、阿波相撲のメッカとなっていた。戦後も盛況であったが、数度の中断時期を経て現在は市内幼・小学校児童の「奉納わんぱくこんぴら相撲」として定着している。

また、秋の例祭時には、奉納相撲の他にも、プロのミュージシャン（宮司の旧友たち）を招いて、珍しい「奉納生演奏会」も開催している。

木津城趾（市指定史跡）



木津城は中世の山城で、撫養町木津字城山にあった。天理教撫養大教会の裏にある独立した標高64mの小山に位置している。永禄～天正期（1558～1592年）には小笠原氏の一族である篠原肥前守自遁の居城であった。天正5（1577）年に勝瑞城主三好長治が討死した後、自遁は自立の志を持つものの、結局新しく勝瑞城主になった十川存保に従うこととなる。天正7年に土

佐の長宗我部元親に圧迫されて存保が一時讃岐に退くと自遁も後を追ひ、また天正10年に元親が阿波国を平定すると、自遁は自ら城を開き淡路へと去っていった。阿波に入った元親は、木津城の守備を東条関之兵衛に命じ豊臣秀吉の進攻に備えた。この時点で元親は、木津城の防御性を高めるための改築をおこなったものと考えられる。

発掘調査により、自遁が居城していた時期は木津の港を掌握し阿波の物流の鍵を握っていたものと考えられ、城内からは中国製の青磁壺（酒海壺）や備前焼の水屋甕など、棚飾りや茶の湯に使用する道具類が多く出土している。一方、元親が支配した時期は、縦や横方向に掘りや土塁を築き、迫り来る豊臣勢に対抗するため木津城の防御を高めている。

大代古墳（県指定史跡）



大代古墳は、鳴門インターチェンジ西側にある阿讃（あさん）山脈南麓標高約43mの尾根上に位置する。四国横断自動車道建設に伴う調査で発見された前方後円墳である。全長 54m・後円部南北経 31m・同東西経 45m・前方部長 23m・後円部墳高 6.7m・前方部墳高 3.3mを測定する。

調査により、後円部中央から竪穴式石室のほぼ中央に舟形石棺が安置されていることが確認された。石棺は、讃岐の津田町にある火山産の凝灰岩（ぎょうかいがん）を加工して作られたもので、県内では初めて確認された。

竪穴式石室の規模は内側で南北 3.7m・東西 1.1～1.0mで、北小口側で若干広がっている。石棺は、縄掛突起（なわかけとつき）を含む外側の全長が 2.84m、幅が 87 cm、内側の大きさは、長さ 2.3m・幅 66 cmを測り、被葬者は、北頭位に埋葬されていたようである。

石棺内からは、滑石製臼玉（かっせきせいうすだま）などの玉類、棺外の盗掘埋土内からは、銅鏡片（獣形鏡一じゅうけいきょう）・銅鏃・鉄鏃（てつぞく）・鉄剣・鉄刀・鉄鉾（てつほこ）・短甲（たんこう）・鉄鎌などが出土している。また、石室の南東で確認された土坑（SX1001）内からは、碧玉製勾玉2・緑色凝灰岩製大型管玉2・緑色凝灰岩製管玉（りよくしよくぎょうかいがんせいくだたま）8・銅鏡片2が出土している。墳丘からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・鞍形埴輪が出土している。

4世紀後半の築造と考えられる本墳は、鳴門海峡を中心とした海水域や港湾を掌握した首長の墓であったと見られ、吉野川北岸下流域の前期古墳の展開過程を示す上でも重要なものである。

平成13年9月に徳島県指定史跡となり、現地保存されている。

一里松跡



江戸時代、旅の目印となるよう、街道の両脇一里（約 3.9 キロメートル）ごとに植えられた松。旅人の休憩所でもあった。慶長 9（1604）年、全国規模の道路改修に伴って江戸日本橋を起点とし、構築された。一里ごとに土を盛り道程の目印とした塚（一里塚）の上に、エノキを植えていたが、阿波ではエノキの代わりに松を植えたので「一里松」と呼ばれる。

現在、県内には徳島市国府町北岩延壺里塚、美馬郡穴吹町小島一里松など地名として残っている所もある。また、板野郡吉野町には一里松跡の史跡が建立されている。撫養街道では、鳴門市内で大津町大代・大麻町池谷・大麻町桧の 3 力所があった。

大江巳之助



大江巳之助は戦災でほとんど消失した文楽人形の首(かしら)の制作を一手に引き受け、戦後の文楽再興に尽くした人形師である。19歳で大阪の文楽の門をたたき、人形遣いの名人吉田文五郎と吉田栄三から指導を受け、人形作りに精進した。

明治40年5月4日	大津町大代に生まれる
昭和5年5月12日	人形師見習いとして大阪文楽座に入る
同年8月	四代目大江巳之助襲名
昭和21年10月	鳴門市へ帰郷
昭和44年 5月	学術功労者として県知事表彰
昭和46年11月	紫綬褒章
昭和48年11月	県無形文化財工芸技術保持者認定
昭和49年10月	第10回キワニス文化賞
昭和51年 3月	吉川英治文化賞
同年 5月	世界人形劇連盟名誉会員に推薦される
同年 5月	国選定保存技術保持者として認定を受ける
昭和57年 4月	勲四等瑞宝章受賞
昭和63年11月	文楽協会功労者表彰

平成2年	国際ソロプチミスト千嘉代子賞受賞
平成3年11月	第三回文化庁長官賞受賞
平成4年 5月	鳴門市市民栄誉賞受賞
平成9年1月24日	89歳で逝去

姫田の瓦



江戸時代後期から、姫田を中心に大谷・池谷・萩原などの一体は、阿南市福井地区などと並ぶ県内有数の瓦産地であった。

昭和58（1983）年の東林院の改築工事で、幅 1.7m・高さ 1.5mの鬼瓦から「天保15（1844）年辰歳5月吉日 姫田村瓦師大吉」と書かれた文字が発見され、姫田村に、当時すでにこれだけの大瓦を焼成する技術が存在したこ

とを物語っている。

昭和6年の統計書を見ると、瓦の製造戸数は、堀江村が板野郡全体の約半数を占め、県全体の産額の約20%を占めていたことが分かる。

その後、終戦直後の住宅再建や朝鮮戦争で瓦の需要が急増し、最盛期には業者数も36を数えた。土こたつの生産も盛んで、京阪神では「姫田こたつ」として愛用され、約50万個が生産された。

瓦工業は、当時の隆盛を見ることはなくなったが、現在も引き継がれ、製作が続けられている。

姫田港



粘土質の土を焼いた瓦やこたつは重く、輸送手段が発達していなかった当時は、もっぱら船が輸送手段であった。旧吉野川を經由し外海とつながる大谷川には、姫田港と総称される中浜・西浜・石園（いその）の3つの船着き場があり、年間40～50トンの瓦が京阪神まで積み出されていた。海岸から約8キロの内陸部にある全国での珍しい「田んぼのなかの港」で、川幅わずか7～8m。当時、姫田港には大小合わせて約900隻が出入りしていたが、その後50年代後半に入り、道路整備が進み陸上輸送が発達、薄くて軽いスレート瓦

の普及とも相まって、製瓦業自体が徐々に衰退し、船着き場の賑わいは次第に消えていった。

森崎の貝塚（県指定史跡）



大麻町大谷字森崎にある貝塚で、紀元前5000年前から同1000年頃の縄文時代の遺跡である。出土遺物は、貝層に混じって縄文時代前期より晩期にいたる土器やサヌカイト製の石鏃・砂岩製の石錘、イノシシや鹿角製の骨角器などが出土した。当時はこの付近まで海が入り込んでいたようである。ここで発見された土器は徳島県立博物館で展示されている。

大谷焼の里



安永9（1780）年、四国八十八カ所霊場の巡礼にきた豊後の国（大分県）の焼き物細工師・文右衛門が、大谷村において、蟹ヶ谷の赤土で作ったのが大谷焼の起源と伝えられている。

安永9（1780）年、徳島藩主から南京・唐津（磁器の焼成）をするよう命令があり、九州より職人を多く雇い入れ、藩窯を造り、磁器の生産を開始したが、材料が地元にないため損失が大きく、短期間で閉窯した。

その後、天明4（1784）年、納田平次兵衛が信楽焼の職人を雇い陶業技術を習得し、大谷村（現在の大麻町）に登り窯を築き、陶器の生産を開始したことが大谷焼の創始とされている。

たことが大谷焼の創始とされている。

古くは藍甕や水瓶、酒やしょうゆの容器など、生活に密着した大物が主に生産されたが、今日では大甕から小さな日用雑器や人形など広範な製品が生産されている。

東林院



天平5（733）年、行基が開基したと伝えられている。四国八十八カ所一番札所霊山寺の奥の院ともいわれ、阿波国八門首の一寺として三好・蜂須賀両家の帰依も深く、昔は末寺十六ヶ寺を数え広大な伽藍であったが、数度の火災、特に元禄年間（1700年頃）の大

火でことごとく焼失したが、京都石清水八幡宮の古文書に、治承2（804）年の記録がある。

「大同3～4（808～809）年頃、弘法大師、四国霊場御開創の為南海道を通り御巡錫の砌り、当地へ遊化し東林院に御滞在、農業奨励の為、御身自ら鋤を取り、米麦の種を蒔き、又、疫病、旱魃の為には御祈念、御祈禱ありて其の害を救い給い、又一方、民衆を集めて真言の教えを説き菩提の善種を蒔き給う。庶民の大師の御徳を慕う事恰も赤子の慈母に於けるが如し。茲に於いて大師、当地御出発に当たり庶民の熱望に答えて等身の尊像を彫刻し給えり。世に之を種蒔弘法大師と崇め奉り年経るまに其の靈驗は広く民衆、信者の認める所なり。」

昭和59年に本坊が新築された。種蒔大師として名高い。

宇志比古神社（国指定重要文化財）



県内に残る神社本殿の中で最も古く、慶長4（1599）年に建てられた時の棟札が残っている。専門家が建物を細かく調査した結果、この棟札の時代に建てられた建物が残っていることが分かった。400年以上の長い間、地域の貴重な財産として人々に大切に守られてきたからこそ、今まで伝え残されてきたと言えるだろう。

この本殿の形は、三間社流造（さんげんしゃながれづくり）と呼ばれ、県内でも有数の大きさを誇っている。建物の外面は木の地肌をそのまま見せるように作られているが、木鼻（きばな）や蟄股（かえるまた）などの部分にはみごとな彫刻が施されており、地方的な特徴がよく表現されている。

阿波神社



丸山神社を昭和に改修し、阿波神社と改称されたもの。祭神の土御門天皇は、後鳥羽上皇の第一皇子である。

承久の乱の後、父後鳥羽上皇は隠岐へ、弟順徳上皇は佐渡へ流され、土御門上皇は、自ら土佐へ。その後、阿波へ遷り、当地で崩御された。上皇を慰めるため、県社寺課の設計

監督により皇紀2600年の記念事業として、県民の浄財と7万人といわれる勤労奉仕により、昭和18年10月に竣工、県社となる。同年11月県議会は四国唯一の官幣大社に昇格させるため奏上書を提出し内定されたが、終戦により、日本全国の神社社格が廃止されて現在に至っている。

池谷宝幢寺古墳（県指定史跡）



大麻町池谷の宝幢寺裏山に造られた、全長約 47mの姿の整った前方後円墳。自然の地形をそのまま利用し、少し土盛りをして形を整えており、4世紀後半に作られたものと考えられる。大麻地区は徳島県内でも古墳群が集中する地域であるが、この古墳は中でも比較的早い段階で築かれたものである。

天河別神社古墳群（県指定史跡）

《1号墳》鳴門市大麻町池谷字滝ヶ谷 天河別神社境内



標高 22.6mの丘陵部に築造された、直径約 25m・高さ約 2.6mの二段築成の円墳であるが、東半分が社殿建築のため削平されている。墳丘北西から北東にかけて、尾根を裁ち割る形で幅 3～4m・深さ 0.4m以上の周壕が残り、東側に続いていた痕跡を残している。2号墳と接する南側は後世の土地改変により墳丘形状が大きく改変され旧形状を留めていない。墳丘西側は

自然地形の播鉢状谷部に続き、周壕等による区画は認められなかった。墳丘は北西からのびるゆるやかな尾根筋を断面L字状に切断し周壕を掘削するとともに、自然地形で下降する墳丘築造範囲を平坦に加工した後盛土・整形する。盛土は尾根上方部である北側で約2m確認された。

墳頂部には南北 8.2m・東西 5.2m以上の規模を測る長方形の墓壇が穿たれる。墓壇中央には南北主軸の内法規模で南北約 5.08m・東西北側約 1.1m・東西南側約 1m、基台上面からの現存高約 1.4mの竪穴式石室が構築されている。石室内には北小口西側から侵入した松根が、両長側壁内側に沿ってのび進み、その一部は棺床面にも入り込んでいる状況であった。

この竪穴式石室は入念な造りで特徴的な構造を有す。まず墓壇底面に赤みを帯びた粘質土で高さ約 20 cmの断面台形状の基台をつくり、小ぶりの砂岩川原石を粘土とともに貼り付けた礫混粘土で基台を覆う。礫混粘土上面には水簸された緻密な粘土で舟底状の棺床を築き、その外周部に礫混粘土で土手状の台をつくり（礫周帯）、内面を中心に朱を塗布している。礫周帯の上には結晶片岩（塩基性片岩・泥質片岩）・紅簾片岩板石を用いて下位側壁を垂直に築く。木棺を安置したのち棺床と木棺の隙間を礫混じりの粘土で充填する。棺床面は南北で 16 cm程度の高低差を有し、北小口側を高く設定している。また棺床面底部は、長軸側で南北小口に向かって緩やかに反り上がる。

短軸側は幅約 20 cmの平坦な底部から大きく逆ハの字状に開く形となる。棺床上面からはコウヤマキ製の棺材片が確認された。棺床の形状から長さ 4.3m前後・最大幅約 0.9mの舟底状の組合せ式の木棺が安置されていたものと推定される。棺床平坦面には高い密度で朱の散布が見られ、棺内からは朱と共に北小口より 1.2～1.4m南に鉄剣 2・ヤリガンナ 1・鉄斧 1・刀子 2、北小口より 1.7m南から銅鏡 1、南小口より 0.7 m北から土師器片 1が確認された。副葬品の確認状況と棺床面の高低差から被葬者は北頭位に埋葬されたと考える。木棺にはその上面と小口部を被覆するための被覆粘土が置かれ、木棺と木蓋の間に生じた隙間を埋めていたものと考えられる。

棺床部の立ち上がり部の高さから上位側壁を結晶片岩（塩基性片岩・泥質片岩）・紅簾片岩板石をもって築いてくが、一段目はやや内側に迫り出させたのち、二段目を下位側壁の位置まで戻して三段目以降を緩やかに持ち送りながら構築していく。長側壁と小口部の接合状態は、北小口側の上位では持たせかけ構造で、内側に持ち送り、北小口上面は隅丸となるように配石される。

片岩で築かれる石室外周には砂岩礫と片岩を併用し四周を囲む外周帯が確認されている。外周帯は二重に築かれるが、石室石材とこの外周帯の石材は完全にかみ合っておらず、裏込めの役割を果たしていないと考えられる。長側壁最上面には手のひら大の扁平な結晶片岩板石が散在する。石室の閉口には木蓋が用いられ、木蓋端部を片岩小片で覆い粘土で被覆されたものと推定される。石室最上面は南北で約 50 cmの高低差があり、北小口側を石材で高く被覆する意図が窺える。

出土遺物のうち、石室内から出土した副葬品については、ほぼ現位置を保った状態で確認されている。出土状況から棺内に副葬されたものと考えられる。棺内北小口側で鉄剣 2・ヤリガンナ 1・鉄斧 1・刀子 2がまとまった状態で、棺中央部北よりから銅鏡（珠文鏡） 1が、棺内南小口側で土師器片 1が確認されている。また墳頂からの流入埋没土内からは土師器片が確認されている。土師器は東阿波形土器の広口壺口縁部である。棺内南小口側の木棺被覆粘土内からの出土で、この粘土内には図化したもののほか小豆大以下に粉碎された土器微細片を若干含む。墳丘からは一部赤色顔料を塗布した土師器片が出土している。

《2号墳》



1号墳の南東側に位置する円墳で、墳丘の一部が1号墳と重複する。直径約 26m・墳高約 5mの二段築成で、基底部には列石と敷石状のテラス部を伴う。墳頂部には南北 6m以上・東西約 3.3mの墓壇が被覆粘土に覆われて遺存することを確認している。墓壇内には竪穴式石室が良好に残り、亀甲状に結晶片岩・紅簾片岩板石を組み上げている状況が確認されている。この石室外面の状況から、2

号墳の埋葬主体は側壁上部を強く持ち送り、合掌状に閉口する竪穴式石室の形態と想定している。墳丘には二段のテラスが築かれている。裾部のテラスは幅約 1mで砂岩礫を貼り石状に平坦に配する。二段目のテラスはやや傾斜をもち砂岩礫の葺石を伴う。

このテラス部より上部は盛土によって築かれたものと考えられる。2号墳墳丘斜面からは直口壺・二重口縁壺が確認されている。天河別神社境内にある11基以上の古墳群で、このうち4号墳からは神獣鏡1面が、5号墳からは神獣鏡2面が出土した記録がある。

萩原2号墳

萩原2号墓で、板材でつくった墓室・木槨（もっかく）を積石で囲んだ三重構造の埋葬施設が確認された。県教委と県埋蔵文化財センターによると、築造は弥生時代終末期の2世紀末～3世紀初頭で、邪馬台国の女王、卑弥呼が活躍した時期に一致する。石で木槨を囲う例は、他には弥生墳丘墓と前方後円墳の過渡期的存在とされるホケノ山古墳（奈良県桜井市、3世紀前半）だけで、同古墳の構造に影響を与えたのは確実。前方後円墳の成立に阿波地域が大きな影響を与えたことを示す貴重な資料となる。墳丘は直径20mの円丘に、方形の突出部が付いた形態。円丘の中心に棺を納め、15～20cmの砂岩を積み重ねた壁で囲ったうえ、その外側に40～60cmの砂岩を積んで、全体を覆っていた。埋葬施設は東西6.5m、南北4.1m。朱を内側に塗った木槨を、砂岩を積み上げた壁2層で覆った構造だったとみられる。

一方、ホケノ山古墳には中間に石の壁はなく、木槨を石で囲う二重構造。徳島、香川両県には石清尾山（いわせおやま）古墳群（高松市）など、石を積み上げた古墳時代前期の積石塚が点在。「画文帯（がもんたい）神獣鏡（しんじゅうきょう）」などの中国鏡も出土、瀬戸内で勢力を広げた有力豪族がいたらしい。県教委は「阿波や讃岐の墳丘墓が奈良盆地東南部での前方後円墳の発生に大きな影響を与えたことが確実にになった」としている。（毎日新聞）

これらのことから、2世紀末～3世紀初頭には、四国と畿内を結ぶ撫養街道の原形がすでに存在していたことが確認できる。



市内の古墳と港

りょう ぜん じ 霊 山 寺



霊山寺は天平年間（729～48 年）聖武天皇の勅願によって、行基が開基した。

弘仁 6（815）年、弘法大師はこの地に止まって修法し、四国に 88 力所の霊場を開くことを祈願した。この間に釈迦如来の靈感を受け、この像を彫刻して本尊とし堂宇を建立し、安置して天竺の霊山をわが国に移す意味で竺和山・霊山寺と名付けた。

その後大師は四国の地に大日如来の胎藏界曼荼羅の道場を求め、各国を発心（阿波国）修行（土佐国）菩提（伊予国）涅槃（讃岐国）の道場とし、88 力寺をこの道場の中に開き、霊山寺を八十八力所霊場第一の札所に定めた。

その後は寺運も大いに栄えたが、天正年間（1573～93 年）長曾我部軍の兵火にかかって多くの堂塔を焼失した。

やがて再建されたが、明治 24 年に通夜堂から出火して本堂と多宝塔を残して焼失し、現在の建物はその後再建された。本堂は昭和 40 年に解体修復された。

現在も四国霊場八十八力所の第一の札所として、人々の信仰を集めている。

大麻比古神社



大麻比古神社は、式内社、阿波国一宮で、旧社格は国幣中社。

阿波国・淡路国両国の総鎮守として、現在は徳島県の総鎮守として信仰を集める。大麻比古神を主祭神とし、猿田彦大神を配祀する。大麻比古神は天太玉命とされる。天太玉命の子孫の天富命（あめのとみのみこと）が阿波忌部氏の祖を率いて阿波国に移り住み、麻楮の種を播殖するなどしてこの地を開拓、祖神の天太玉命（大

麻比古神）を阿波国の守護神として祀ったのに始まると伝える。後に、古くから大梁山に祀られていた猿田彦大神を合祀したという。

延喜式神名帳では名神大社に列し、享保 4（1719）年には最高位の正一位の神階を受け、明治 6 年に国幣中社に列した。

祭神は、明治以前は猿田彦命と阿波忌部氏の祖の天日鷲命としていたが、明治以後は古伝に基づいて天太玉命とされた。

「おあさはん」と親しまれ、初詣を初め数々の行事には、沢山の参詣者で賑わう。

ドイツ橋・めがね橋



ドイツ兵は、板東俘虜収容所に収容された1917年9月から1年9ヶ月の間に、収容所近くに11の橋（木の橋が6つと石橋が5つ）を造ったという記録があるが、現在残っているのは、大麻比古神社裏側にある小さな「めがね橋」と、最後に造った「ドイツ橋」のアーチ式の石橋2つだけである。「ドイツ橋」は、住民が遠回りしなくてもよいようにとの配慮から、75立法メ

ートル、重さにして195トンもの石材（近くの和泉砂岩）を集め、母国の素晴らしい土木技術を生かして造られた。

完成までに3ヶ月を要した。モルタルなどはいっさい使わず、石を組み合わせただけの工法だが、90年を経た今でも少しのゆるぎもみられない。

この橋に対しての賃金は支払われなかったが、俘虜の一人は、「創造の喜びと働く意欲」こそが、最大の報酬だったと誇っていたそうである。



極楽寺



四国第二番霊場。行基の開基と伝えられる。弘法大師が順錫の際に、阿弥陀経を読誦し修法した。その結願の日に阿弥陀如来がいずこからともなく現われ、大師におことばを賜った。

大師はそのお姿を忘れないうちに、ただちに刃をとって、阿弥陀如来を刻みはじめ、旬日で完成させ当寺のご本尊として納めたという。ところが、後に、御本尊の後光が鳴門の長原沖まで達し、漁業に支障を与えた。漁民たちは悩んだ末にこの光をさえぎろうと本堂の前に小山を築いたところ、それからは大漁であった。「日照山」の山号もそれにちなんでつけられたと云われている。

境内には、大師お手植えといわれる大杉があり、霊場を訪れる大勢の人々から信仰を集める寺院である。

ドイツ館



第一次世界大戦時の1917年から1920年の約3年間、板東俘虜収容所に収容された約1000人のドイツ兵と地元住民との心温まる交流の歴史と、牧畜・建築・音楽・スポーツ・印刷・食品製造など、ドイツ兵が残した文化や技術などの貴重な史料を多数展示している。

特に、日本で初めてベートーヴェン「第九」交響曲を全曲演奏したことは有名で、館内の「第九シアター」では、実物大の人形が「第九」を演奏している。

1974年には、鳴門市とドイツ・リュネブルク市との間で姉妹都市盟約が締結され、相互に使節団を派遣するなど、現在も活発な交流が続いている。

2007年には、当時のドイツ兵の暮らしぶりや温かい交流の様子を描いた感動的な映画「バルトの楽園（がくえん）」が日本とドイツで公開された。

賀川豊彦記念館



賀川豊彦（1888年～1960年）は、神戸で生まれたが、幼くして両親に先立たれ、4歳から16歳までの少年期を父の郷里鳴門で過ごした。彼の人格や思想の原点は、この少年期に形成されたと考えられる。

大正デモクラシーの先頭に立って、日本の民主化に大きく貢献し、生涯を通じて、「友愛・互助・平和」の精神を提唱し続け、「日本のガンジー」とも呼ばれた。

ノーベル平和賞の候補になったが、惜しくもその翌年逝去した。

この記念館は、彼の遺志を受け継ごうとする人々の募金活動により建設され、賀川豊彦の偉大な業績を顕彰し続けている。

ドイツ兵士の慰霊碑



板東俘虜収容所で亡くなったドイツ兵を慰霊するため、大正8（1919）年8月末に完成された。慰霊碑を造るかどうかについては、ドイツ兵の間でもかなりの議論があり、帰国したのち、その碑が放置され、死者を傷つけることにならないかという危機が強かったようだが、仲間をきちんと弔って帰りたいとの意見が多数を占めたため、建設されることとなった。板東での死亡者

9名（1名水死、8名病死（内3名スペイン風のため、1名かぜにチフスを併発））と板東に来るまでの丸亀と松山で亡くなった2名も含む11名が祀られている。

この慰霊碑を高橋春枝さんが手厚く世話をしていたことがきっかけとなり、現在の親密な日独交流へと発展してきた。

板東俘虜収容所内の製パン所跡



板東俘虜収容所内には、収容所開設まもなく製パン所が設置され、パン焼き窯が築かれた。

しかし、日本が造った窯は故障が多く度々修理が必要なものであった。そのため大正7年6月、パン窯の改修工事の申請を提出し、同7月に許可されたことにより、ドイツ人によって新たに設計・建設された。

9m×5.4mの建物の中に、南北 4.6m、東西 3.7mの長方形の石窯基礎を築く。

窯南面には一辺 1.6mの階段状の窪みを付設するが、これはパン窯が上下に作業室を持っていたことを伺わすものである。

製パン所の床はモルタル貼りで、水甕や、洗い場などが設置されていたことが、確認された遺構から判断される。

《撫養街道を行く》をご覧ください、ありがとうございました。

今回は、撫養街道沿いの文化や歴史の一部のご紹介となりましたが、今後も引き続き、内容を更新しながらご紹介していきたいと思っております。

昔の街道の風景・風俗・行事等の写真や街道にまつわる昔ばなしなど、興味深い史料や情報がございましたら、下記までご連絡ください。

※歴史的写真については、次の写真集より引用させていただきました。

「ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 鳴門」西田素康編集 昭和60年発行

「目で見える鳴門・板野の100年」西田素康編集 平成11年発行

772-8501 鳴門市撫養町南浜字東浜170

鳴門市文化交流推進課

TEL:088-684-1150 FAX:088-683-0237

メールアドレス:bunkakoryu@city.naruto.i-tokushima.jp